

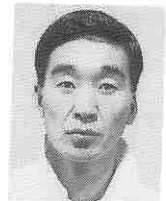
決勝 熊谷工 18 - 7 行田工  
 (北関東代表決定戦)  
 熊谷工 46 - 6 高崎 (群馬)  
 <本大会>  
 1回戦 熊谷工 66 - 0 川島 (徳島)  
 2回戦 " 12 - 33 花園 (京都)

吉田道行(現所沢高校教頭)が創部した和光高校が台頭して来た。吉田が転勤する57年度まで常時ベスト4の実力を有するチームに成長したのだった。

甲府で開催された関東大会に初出場の和光をはじめ4校が出場した。そして4チームとも相手校に快勝した。

国体予選においては、SO山崎主将、SH柳田を中心にした浦和が県大会を難無く制し、埼玉県としては久しぶりに単独チームで関東予選に臨んだが、全東京には一歩及ばなかった。小畔東の好指導によって真の実力を備えたチームに成長した浦和に県内外から称賛の惜しめない拍手が送られた。

さて秋風が吹く様になって来ると夏の炎天下でいかに鍛えたかがチームの強弱となってはっきりと戦績にあらわれてくる。努力が間違いなく正直に結果に出てくるラグビー競技の教育的効果は、他競技に優るとも決して劣らない。全国大会予選になり、高校生活の有終の美を飾ったのは熊谷工業であった。快足選手田島健を中心に二年生主体のチームを名伯楽森喜雄が見事に仕上げた。北関東代表決定戦はレベルの低い群馬が相手なので何の問題もなく本大会に進んだ。1回戦は四国の川島高校に66対0と大勝して2回戦に進んだが、京都の名門花園高校には力及ばず本大会での2回戦突破は果せなかった。



## 高校ラグビーの 想 出

昭和49年度 熊谷工業高校卒 田島 健

「青春再び来たらず」この言葉と共に私のラグビーとの出会いが始まりました。と言うのは、熊谷工業高等学校のラグビー部に入部した時、森監督の入部者へのあいさつ第一声だったので。

私にはすぐにこの言葉の本当の意味がよく理解出来ませんでした。これから私の高校ラグビーの思い出の中に私なりに3年間のうちでこの言葉を理解したことを含めて紹介させていただきます。

まずはボールの握り方、パスの仕方を走りながら毎日毎日先輩から指導され基礎をしっかりと教えられました。これが皆が大嫌いなランパスだったので。当時は準備体操代りに100Mを15往復もするので新人はたまりません。

そして私のラインの中に現在熊谷工ラグビー部監督の塚田先生が一級上の先輩でいたのです。スタミナの固りの様な先輩で、15往復を終り、「オイ！次の練習」という調子ですから大変でした。

他校の友だちに話を聞くと、ランパス3本とか、5本という話ですから15本というのは当時熊工の名物だった様に思います。

いよいよ初めての試合です。私は右ウイングでデビューしました。3年間で100試合以上しましたのでもちろん対戦相手は覚えていませんが、デビュー戦の出来事でした。「オンサイド」と声高らかにパントされたボールに向かって走り始めたその瞬間です。いきなり笛が鳴るのです。当時行田工監督高橋先生の笛でした。「あんた、オンサイドというのは……………」という具合に試合を止めて私にルール説明を始める一幕。それもそのはず、ラグビーを始めて数ヶ月、そしてデビュー戦キッカーのかなり前方より私は走り出したのです。

高橋先生に試合中ルール解説をされたのですから今でもこの出来事は鮮明に覚えています。絵に書いた様なオフサイドだったわけです。

そしてどうしても忘れられないのは、夏合宿です。3年間の中には、色々な思い出がありました。思い出を作ってくれたのが森監督でした。毎日の練習は特別な事がないかぎりグラウンドの真ん中にドンと座り部員の思うままに練習させてくれ、キャプテンの指示により進みます。しかし合宿となると事は違います。もう大ハッスル、おまけにOBの登場もあつたりしてお祭り騒ぎです。これが熊工ラグビーの伝統につながっているのだと思います。

ちょうど夏頃より新人も森監督の事を「おやじ」と言い始めます。でも森監督に面と向っておやじとは言えませんから公式ではありません。しかし

ここでは、森監督の事をおやじと書かせていただきます。

特に合宿で一番きついのは夏合宿でした。7日間は別世界です。夏合宿は水の確保が一番大変なんです。コーラの缶などに水を入れ、草むらやひどい部員は便所に隠す者もあり、練習の最中におやじの目を盗んで飲むわけでスリルがあり、あの水の味は格別でした。今、思いますと合宿により、教室で学ぶことがなかなか出来ない、協調性を学ぶことが出来たと思います。特におやじは部員に「あだな」を付けて協調しやすい様にしていたようです。ご紹介しましょう。落語家に似ているので小円遊、風呂屋の長男で番台、タコボー、ゴリと言った調子で、苦しい練習の最中でも顔と「あだな」がぴったりですからつい笑ってしまう事もありました。

OBの中にも気合の入った先輩がいました。差し入れに来たのですが、練習を見ていて私たちがあまりにもタックルをしないので背広のまま「タックルはこうやるんだ」ととびこむ大先輩の村田さん。

そして合宿の最終日は、恒例の25km走です。朝5時起床で熊谷-深谷-川本-熊谷の三角点を走りますが、合宿最終日ですから体は打撲、すりきず、筋肉痛等々でぼろぼろです。ただでさえ25kmを走るのは大変なのに「おやじ」は何を考えているのかと思いました。

徹底的に体と精神を鍛え抜かれた私は、2年生、3年生と連続で全国大会出場を経験したのです。2年生の時は、南四国代表新田高校に1回戦敗退、3年生の時は、私はキャプテンで2回戦で花園高校に敗れましたが、全国レベルはこんなものかと私も後輩達も思っただけで帰って来たと思います。それは手ごたえがあったからです。「おやじ」もそう感じていたはず。そんな後輩達が後に全国大会で準優勝を成しとげました。

私は、全国高校東西対抗の東日本代表選手に選ばれ、12番として国立競技場で昭和50年1月15日に試合を経験することができました。初めて母を試合に呼び、国立競技場に立ちました。今でも良く覚えています。鳥肌がたち、体が宙に浮いてしまっただけで思い通りに走れなかった様でした。

この試合中、秋田工西館君が左角にトライをし、

私がコンバートを狙うことになりプレースしていきキック。芝をしっかりとキックしてしまいゴロ。競技場は大爆笑となってしまいました。後半に入ると平常心にもどり、観衆を見られる余裕も出て来ました。二度とすることの出来ない試合なんだ、「青春再び来たらず」この時は二度と戻って来ない、夢中でプレーをしました。

おやじが言った「青春再び来たらず」は年代に関係なく、今という時をしっかりと生きなさいと教育してくれたのだと感じています。ラグビーは15人で手から手へ協力し体を張ってボールを継ぎゴールを狙う。個人の失敗は全部ドントマインドだ。ノーサイドの笛が鳴るまで考えていることはみんな一緒、おまけに楯円球。高校スポーツの中で一番すばらしい男っぽい競技だとつくづく思います。

私の同級生は7人でした。全員家庭を持ちましたが、結婚式のあいさつは、必ずラグビーが話題でした。それほどにラグビーが思い出を残してくれたのだと思いますし、楽しい事も苦しい時も一緒に乗り切ったからだだと思います。そして楯円球を今でも蹴りますが、どころどころか、どう飛ぶのかわかりません。34歳になりますが一生練習しても自分の思った通りに蹴ることは出来ないと思います。ラグビーの魅力はこの辺にあるのだと思います。私は大学ラグビーを怪我の為2年間経験しただけでしたが、初めてラグビーを知った高校ラグビーが全国のラグーマンと会え、また夢中にさせてくれました。また他校の先生からも声をかけられ指導をいただきました。

熊谷高堀口先生、児玉農工小野先生、児玉高尾崎先生、浦和高小畔先生、そしてライバル校だった行田工高橋先生と当時の先生方が思い出されます。

思い出多き高校ラグビーに感謝いたします。  
 「青春再び来たらず」

### 昭和50年

#### ※新人戦

準決勝 行田工 27 - 6 立教  
 熊谷工 20 - 3 浦和  
 決勝 熊谷工 17 - 6 行田工

#### ※学徒大会兼関東大会予選

準決勝 行田工 40 - 9 浦和